



Title	『金玉要集』覚書：その本文を中心に
Author(s)	山崎, 淳
Citation	詞林. 2002, 32, p. 34-46
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67491
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

『金玉要集』覚書

—その本文を中心に—

山崎 淳

一

内閣文庫蔵『金玉要集』は、重要な唱導資料として、諸氏に取り上げられ、その本文も部分的に翻刻されていたものの、全貌は未紹介のままであった。このたび『磯馴帖』村雨篇（以下、磯馴帖）（伊藤正義氏監修 平成14 和泉書院）の中に全文翻刻が収められたことは、この作品のみならず、説話・唱導研究にとつても意義深いことであるといえよう。そして、本作品を全体的に見渡そうとする試みも、近本謙介氏によって始められようとしている。

稿者も翻刻に携わる機会を与えられた者だが、本稿では、その作業において、いくつか気付いたことを報告していきたいと思う。知識不足や誤読なども多々あるかと恐れるが、今後の研究に多少なりとも寄与できれば幸いである。

なお、本稿に引用する『金玉要集』本文は、基本的に『磯馴帖』のものをを用いるが、一部私に補訂したところがある。

項目の見出しは、『磯馴帖』の「目録」（138～139頁）に従う。また、引用本文の後の（140下4）などという記述は、『磯馴帖』での頁・段・行を示している。

二

『金玉要集』の書誌情報や書写状況については、『磯馴帖』の解題に記されているが、ここで少し補足をしておきたい。本書は四冊からなり、十の目録を備えている。『磯馴帖』での分類〔第二〕～〔第十〕は、これらの目録に基づいており、〔第二〕～〔第四〕が一冊目、〔第五〕〔第六〕が二冊目、〔第七〕〔第八〕が三冊目、〔第九〕〔第十〕が四冊目に相当する。そして、一面の行数は、〔第二〕〔第三〕〔第四〕〔第五〕〔第七〕〔第九〕〔第十〕が八行、〔第三〕〔第六〕が十行、〔第八〕が九行と、各ブロックで一定である。

書写者は数人いるようであるが（磯馴帖解題参照）、〔第二〕〔第四〕〔第七〕が同筆と推定される。また、〔第三〕〔第六〕が

同筆と推定される。残りのブロックのうち、「第八」は、他とは別筆と思われる。「第二」「第五」「第九」「第十」は、互いに同筆か別筆か、現在の所、判断しかねる。今後の課題としたい。

底本とした内閣文庫蔵本以外の伝本として確認されるのが、彰考館蔵の「第八」抄出本のみであることは、『磯馴帖』解題に記される通りである。底本には異本注記もあるが、「第七」に三箇所（191上11、192上14、196上13）認められるだけである。この注記に用いられた本がどのようなものであったかは知るべくもない。この他に、傍注や付訓も散見する。

本文中には、しばしば「○」で翻刻した記号が見られる（157下7、158上17、167下3、169上1、179上18、179下5、8、180下16、181上9、15、184上7、189上17）。例えば、「第六」〔為弟子施主段〕の末尾には、

化功帰已ノ故、松門風静ニシテ、凡靈皆離苦域。

（189上17、18）

とある。「静ニシテ」以降に何か文言が省略されていることは明らかであり、これは他の唱導資料にも共通するものである。加えて、右の例の傍線は、前の部分を見る必要のあることを示唆している。実際、これより前に位置する「第六」〔為師範施主段〕の末尾には、

化功帰已ノ故ニ、松門風静ニシテ、四曼陀之尊久句、竹窓霧清、五相論之月鎮ニ明ナシ。殊ニハ、院内繁昌、寺中快樂、

興隆仏法、衆僧和合、乃至、七世恩所、俗骨仙骨、併免輪廻、三界含職、聖靈凡靈、皆離苦域、仰承云々。

（187下5、9）

とある。従って、ここには一つの編集意識を認めることもできるのではないだろうか。

また、行末に「、」という記号らしきものが記されていることもある（171上15「図」、192上5「リ」、194上3「ヨ」、196上18「筑」のそれぞれ下）。翻刻では全て省略しているが、それは「第七」「北野天神御事」に、

漸歩ミヨリ、ノ堂ノ前ノ案ノ上ニ打置テ

とある如くである。あるいは句読点を意味しているようにもあるが、

肥壮多力ナル筑、ノ紫牛ヲ引ケレトモ

（196上18、19 前の引用に同じ）

を見ると、必ずしもそうとは言いい切れない。ただし、例が少ないので、これ以上は踏み込まないことにする。

三

「金玉要集」の扱いにくさの大きな要因は、その本文にあるといっても過言ではない。前節でも触れたように、底本の行数は「第二」〜「第十」各ブロックで一定しているし、字

も、それほど読むのに困難な印象を与えるものではない。ところが、誤写・当て字・衍字・衍文・脱字・脱文、あるいは意味を理解しないままの書写と推測される箇所が極めて多く、そのため本書は非常に読みにくいものとなっている。

『磯馴帖』所収の本文は、「翻刻凡例」において、「本書の翻刻は校訂に近い本文を提示することになったが、なお解読できぬ箇所が多く、中途半端な結果にならざるを得なかった。とりあえず参考本文を示して、今後の研究に期待したい」と記されているように、原文にかなりの手を加えた結果のものである。本文については、今後ともさらに検討していく必要がある。本節では、誤写や脱字などと推測される箇所をいくつか取り上げ、試案を提示することにした。

まず、以下に挙げるのは、「第九」「泰澄大師御事」の最後の部分である。

（泰澄、疫病を「十一面法」によって追い払う）其時、授大和尚位、号泰澄大師。神護景雲元年、御歳八十六、三月十八日、結跏趺坐、大日定印、遷化。頭り放神光、山谷金地也。穴留蓮花。神融行頭白山権現事、阿説アリ。一日記、元正天皇、御時、靈龜二年丙辰歲、始顯給。四十四代帝、諸國々々分寺立、此時也。一日記、光仁天皇、御時、宝龜二年辛亥、天朝大師顯之。白山御前、十一面、小男地、阿弥陀、因曼陀羅圖也。別山、大行事清観音、五人王子、大郎、不動、次郎、虚空蔵、三

郎、弥勒、信州、浅間、権現、同神也。

(215下6、15)

ここで注目されるのは、泰澄が遷化した後に、補足的に述べられている一つ目の傍線部以下の記述である（なお、「泰澄大師御事」の大部分は、「泰澄和尚伝記」に近い本文を持つ）。まず気付くのは、泰澄の名前が七行目のように「大朝」という表記に変わっていることである。音が通じていることからの当て字と考えられるが、「第九」の目録にも、「大朝」という表記（213上5）が見られることはいささか気になる。また、九行目で「五人王子」としているのにもかわらず、以下には「三郎」までしか記していないのも不審である。

これらの点から見ていくと、実は、「神道集」という作品の存在がクローズアップされてくる。『神道集』（赤木文庫本）には次のようにある。

抑白山権現者、北陰加賀ノ国白山ノ雪山ニ跡垂下ヘリ。彼御山ト申ハ、千歳ノ寒水永結解ケス、四節ノ名花ハ、一時競ヒ開ケト云。胡紫ノ白根ハ、白雪積リ潔シ、婆梨申ヘテ山トセリ。此ノ如ク清浄ノ靈地ニ、応跡和光ノ事ヲハ、代何レ々ノ時トカ云ハシ、此山ハ高聳ケテ、白雪初雨リ下タリケル昔ヲ、権現応跡ノ示現初ト申ヘキ。仏眼神眼ノ吉ク此ヲ知食ス。今顯シ始ル事ニ付テ阿説アリ。一日記、元正天皇、御時、靈龜二年丙辰、年、白山権現ニ顯レ始レ下ヘリ。此帝ハ日本ノ四十四代マデ女体也。諸國々々分寺ハ、此時始マレリト云。一日記、光仁天王、御宇、宝龜二年辛亥、年、大朝大師、此顯上リ

下リ。…凡白山権現者、大御前^ハ十一面觀音也。小男^{コナリ}地^ハ本地アミタ也。因万タラノ面也。別山大行事^ハ本地請觀音也。五人、王子御在^ス。太郎^{タロウ}、劍^{ケン}御前、御本地^ハ不動明王也。…(不動の説明)…次郎^{ジロウ}、王子^ハ本地虚空藏菩薩也。…(虚空藏の説明)…三郎^{サンロウ}、王子^ハ本地々藏菩薩也。…(地藏の説明)…四郎^{シロウ}、王子^ハ毘沙門天王也。毘沙門^ハ本地、文殊ナリ。…(文殊の説明)…五郎^{ゴロウ}、王子^ハ本地三六菩薩是也。…(弥勒の説明)…当社権現^ハ、惣シテ五万八千、采女皆鷄鳥也。信濃^ハ、浅間^ハ同ク此御神^{ナリト云々}。

(貴重古典籍叢刊 1・292、297)
省略を交えながら引用したが、以上は、巻第六・卅五「白山権現事」の全部であり、六行目の傍線部から最後の傍線部までが「金玉要集」に対応している。多少の違いはあるものの、「日記」を二つ挙げることに、「大朝」の表記など、二書の重なりは大きい。「金玉要集」の本文が、「神道集」における「五人、王子」の本地の説明を省略した形になっていることも看取できるであろう。また、「神道集」では「五人、王子」が全て記されており、三郎の本地が地藏であり、弥勒は五郎の本地ということになっている。

もちろん、「神道集」が直接の典拠であると、この例だけで判断するのは短絡的ではあるが、「金玉要集」の如き本文が出来たためには、少なくとも「神道集」のような本文が前段階にあったと考えるのが自然であろう。「金玉要集」では、脱

落があったか、もしくは、はなはだ拙劣な省略が行われたと見なすべきではないだろうか(翻刻で「脱アリ」の注記をつけたのはこのため)。「磯馴帖」解題でも触れているように、「金玉要集」と安居院唱導との関係は看過できぬものである。その点からも「神道集」の存在は視野に入れておくべきである。次に挙げる、「第三」「同悲母事(二)」にも脱字が想定できる。

就中^ニ、携世務^ヲ習^ニ、常^ニ無対面^ニ、住遠国^ニ、不^レ尽礼儀^ニ、隔遼遠^ニ、間^ニ、日夜無向顔^ニ、朝暮之言詞^ヲ希也。如此人、不訪病悩^ニ、永別^ニ悲深^ク、不聞^ニ御音^ニ、終^ニ隔歎切也。母^ハ是恩之源^ニ、死^ハ是別之終也。久不離^ニ始離^ニ、常^ニ会^ニ暫隔^ニ之人^ニ、尚痛之^ニ、又人惜^ニ。何況^ニ、於永別離^ニ乎。

(159上17、下2)

最終行の「又人惜^ニ」は、これではおよそ意味を成さない。この部分にとつて参考になるのが、「第三」「同悲母事(四)」の一節である。

就中^ニ、随世務^ヲ習^ニ、或^ハ卜居於遠国^ニ、隔境界遼遠^ニ、御子息等^ハ、日夜向顔^ハ不常^{ナラ}、朝暮之拜見^ヲモ希也。母是生始^ニ、死^ハ是分^ニ終也。久不離^ニ始別^ニ、常^ニ值^ニ暫隔^ニ人^ニ、尚痛之^ニ、又惜^ニ之^ニ習也。況^ニ、不見^ニ病床之御姿^ヲ、不遇^ニ終焉之剋^ニ、御人^ハ、哀傷越旁人^ニ、恋涙今一染可深^ニ御事也。

(162上4、9)

二例とも、「就中」以下、類似する文辞が綴られ、「況」で

永遠の別れの悲しさを強調している。おそらく、久しく顔を合せていなかった親の死に対した子の悲しみを表現する定型なのであろう。そして、この後掲の例によつて、「又人惜」のものとの形が、どうやら「又惜之」習也」であつたと推測できるのである。

『磯馴帖』翻刻では指摘をしていないが、〔第八〕「春日大明神御事」の次の箇所にも脱文の可能性がある。

此湛海公^{（28）}御子二人、御弟二人御座。此ヲ式家申ス。同御弟鎌足四男麻呂ト申、是京家也。淡海公御子、太郎武智麻呂ヲハ南家ト申。二男房前参儀ヲハ号北家ト。是即、藤氏四家也。

（208上18下2）

このまま読めば、傍線部の「此ヲ」は、淡海公不比等の二人の弟（實際は息子）と二人の息子とを指すことになる。しかし、以下、第一人に京家、息子二人にそれぞれ南家・北家が当てられる形で文章が綴られている以上、式家に対して「弟の一人は宇合である」などという文言が必要であらう。右の引用を含む「春日大明神御事」と酷似するのが、先ほども触れた「神道集」の巻第三・九「鹿島大明神御事」である。そこでの対応箇所には、果たして、

此淡海公ハ御子二人御在ス。又御弟二人御在ス。一人宇合式部卿是也。鎌足ハ三男也。此武家号。…

（貴重古典籍叢刊1・105）
と記されており、この後に続く文章ともバランスが取れてい

る。やはり『金玉要集』には脱文があるときではないだろうか。

この他にも、『金玉要集』には、ただちにそれと判別できるあからさまな脱字・脱文が目立つ（151上8、164上2、194下14、220上6など）。ただし、次の例は、どのような脱字を想定するかという点に関して、やや問題あるケースといえよう。

『金玉要集』（第二）「慈父孝養之事」において、「別離」を説く部分の最後は、以下の如くである。

旦那追善^ハ袖^ハ色^ハ、申^{キハ}末葉^ハ露、聖靈恋慕之袂玉^ハ、思^ハ本^ハ滴^ハ也。依之、莊嚴論云、子^ハ父母^ヲ、々々^ハ常^ニ見^ル子^ヲ、諸仏^ハ視衆生^ヲ、尚如羅睺羅^ニ云々。 （150下14下17）

傍線部は動詞に当たる字がなく、下の句を参考にすれば、すぐさま「見」などが抜けていると予想することができる。ここで「莊嚴論」という出典名に着目すると、件の文言は、『大乘莊嚴經論』にはないものの、以下に挙げるように、『往生要集』巻中・大文五の中に見出すことができる。

『莊嚴論』云、菩薩念^ハ衆生^ヲ、愛^ハ之^ヲ徹^ニ骨髓^ニ。恒時欲^ハ利益^ス、猶^ニ如一子^ニ。故由^ハ此等義^ハ、有^ハ憐悔^ハ云、如^ハ父母有^ハ子^ヲ、始生便^ハ盲聾^ニ、慈悲心^ハ懸重^ニ、不^レ捨而^ハ養活^ス、子不^レ見^ル父母^ヲ、父母常見^ル子^ヲ、諸仏視^ハ衆生^ヲ、猶^ニ如羅睺羅^ニ。衆生雖^ハ不^レ見^ル、實在^ハ諸仏前^ニ已^ト。

（大正藏八四・61下）
これは、衆生に対する仏の大きい慈悲を説く部分であ

る。傍線部が「金玉要集」の文言と一致していることは明らかであろう。しかも「往生要集」には、その少し前に、「莊嚴論」という書名も見える。⁽⁸⁰⁾（ただし、「往生要集」では、傍線部の文言は「有懺悔偈」からのものであり、「莊嚴論」からの引用ではない）。従って、「金玉要集」の「子父母」は、「不見」が落ちている可能性が出てくるのである。

類似する文言を有する文献を今一つ挙げてみる。幸若舞の「八島」である。

これが譬へかや、諸仏念衆生、衆生不念仏、父母常子、子不念父母、と説かれたり。諸くの仏は衆生を思ひ給へども、衆生、仏を思ひ申さず。高きも卑しきも、親は子を思へど、子は親を更に思はず。⁽⁴¹⁰⁾（岩波新大系「舞の本」）

二つ目の傍線部からもわかるように、子は親のことを考えない、ということを示すために、ここでは件の文言が記されている。⁽⁸¹⁾このように、他の文献と比較した場合、「金玉要集」の当該部分は、「不見」を落としていると見るのが穏当なようである。ただし、「金玉要集」では、ことさらに「子は親のことを考えていない」という点を押し出している内容とは必ずしも言えず、果たして翻刻での「不見脱力」の注記は妥当だったかどうか、なお検討の余地があると思われる。

以上、脱字・脱文について触れてきたが、衍字・衍文も確認をしておきたい。次の例は、「第三」同悲母事（三）の中に見える。

伏惟、禪定尼聖靈者、慈悲薰内^ニ、柔和稟性、哀憐備、親疎^ニ、礼儀不簡人^ヲ。栄花隠形羅帳之深^ニ、長^ク爲東夷^ノ、生福貴之家^ニ、隠形羅帳之深^ニ、長^ク爲東夷^ノ母^ヲ、面自抽郡、栄花勝人^ヲ。於天下^ニ、非聊尔^ノ人^ヲ、又非可輕人^ヲ。^(160上17下2)

傍線部は四角囲みの部分を繰り返してしまっている。しかも、四角囲みにしても最後に「母」の落ちていることが、傍線部から逆に判明する（翻刻では、傍線部を略し、四角囲みの「東夷」を「東夷母」に改めた。また、即断はしがないが、行目の「栄花」も不自然な印象を与えるものである。

次の例は、「第八」「八幡大菩薩事」の冒頭近くにある。

一説云、筑紫箱崎者、八幡大菩薩御託生所也。故云産宮。

箱崎者、箱中八流、幡入、自然此浜流寄。故、八幡申也。

箱崎者、箱^(199上517)

底本では、傍線部の「者箱」の二字が、行頭に来ており、その行は以下空白となっている。そのために、あたかも書かれざる説・物語が存在したかのように捉えられかねない。しかし、実のところは、四角囲みの部分を誤って再び記してしまったことに途中で気付き、筆を止めたのではないだろうか（翻刻では、傍線部を衍字として省略している）。

この他、翻刻で注記した箇所（165下18）もある。また、指摘はしていないのだが、「第三」同悲母事（四）に記された、孝子として有名な張敷の説話における、

漢土ニ長數ト云者、一才ニシテ別母ニ、不ルニ覺置母ノ形見一、
悲母ノ形見ニ置古キ扇ヲ見泣悲シ侍云々。(162下15、16)

という部分も衍字・衍文の可能性がある。このような混乱を
来した本文が、いかにわかりにくいものであるかは、言うま
でもないことであらう。

さらに、『金玉要集』における当て字や誤写は、例えば、「孝
嬾天皇」(173下5)、「神后皇功」(169下15、16)、「禽戰」(209上18)
など、枚挙に暇がない。「慕」に「暮」(150下13、15、163下14、168
上14、184下3、189上5、203上5)、「并」に「井」(173下13、176上9、
177上17、211下19、212上6、14、16、212下1)、「歎」に「難」(184下6、
186下8、189上12)、「座」に「床」(186上2、186上16)、「努々」に
「奴々」(222下6)を当てている例などもある。あるいは、「如」
と書くべきところを「事過ヌレハ夢ノ始」(夢ノ事モ、時ニ当テ覺
ニ似リ) (229下3、4)としてしまっている一方で、「始」と書
くべきところを「如」(釈迦ノ像ニシテ涌現シケルヲ、…次ニ) 弥
勒之像ニテ顕レ玉ヘリ」(233下6、8)としてしまったケース
もある。このような例は、以上に挙げたものの以外にも、全体
を通して現れるのである(翻刻に際しては、おおむね正字に訂す
るか、もしくは傍注を付している)。

これらの原因が、書写者側にあるのか、親本の状態にある
のかは俄に決しがたい。もちろん、こういった事象は『金玉
要集』一人に限ったことではないであらうし、単純に当て字
や誤写と断定することに問題のあるケースもあるだろう。取

り立てて触れるべきことではないのかもしれない。しかし、
その数の多さをやはり見過ごすことはできないのである。
そうした中で、四つの例を取り上げてみることにしたい。

【雜趣經】云、右肩持母経歴千歳、不能悲母養育ノ恩^一。

(158上7)

これは(第三)「悲母之事(二)」にある、経文の引用であ
る。ここで出典として挙がっている「雜趣經」なる經典は、
管見の限りではその名を確認できない。あるいは散佚したも
のかとも考えられるが、実は、右の部分に類似する文言は、
『仏説父母恩難報經』に見出せるのである。以下に挙げてみ
る。

右肩負父。左肩負母。経歴千年。正使便利背上。然無有
怨心於父母。此子猶不足報父母恩。

(大正蔵一六・778下、779上)

あるいは、『法苑珠林』巻第五十・報恩篇第五十一・引証部
第二には、

又難報經云。左肩持父右肩持母。経歴千年便利背上。猶
不能報父母之恩。

(大正蔵五三・663下)

とあり、より『金玉要集』に近い形になっている。『諸経要
集』巻第八・報恩部第十三・報恩縁第二(大正蔵五四・68上)に
も、「又難報經云」として同一部分の引用を確認することが
できる。どうも『金玉要集』の「雜趣經」は、もとは「難報
經」だった可能性が高い。

この推測を補強するのが、「金玉要集」〔第八〕「泉式部祈往生正業事」における、

残命思ニモ、水魚（魚アルビ）屠所報羊歩、ツ、マル命悲、又思知レタリ。
（202上15～16）

である。「屠所の羊」はボビュラーな喩えだが、「義経記」巻第五の「屠所に赴く羊ふうふの思ひ」〔岩波大系205〕などは、この場合の参考になる。「屠所趣羊」の方が「報」よりも、意味的には適切であろう。「報」と「趣」とは、その草体に似たものがある。おそらく、「雑趣」も、「難報」の誤写に起因するものではないだろうか。

次の例は、〔第二〕「六度集経事」の中に見えるものである。

抑、父恩、不限（浄飯王経ニ）諸経（散在セリ）淨業障経云、
左肩荷父（一）、遶須弥（一）山、一百千通（ト）云トモ、不能報謝（一）
日養云日（一）々。
（152上9～11）

奇妙な印象を与えるのが、最後の「云日」である。「云日」では、何を意味しているのか不明である。原拠を確認してみると、「最勝仏頂陀羅尼淨除業障呪経」に、

左肩担父右肩担母。遶須弥山百千万匝。血流没踝尚不能報一日乳哺之恩。
（大正蔵一九・359上）

という文言を見出すことができるが、これで問題が解決したわけではない。ところが、引用される経文が、前掲〔第三〕「悲母之事（一）」でのもものにもよく似ていることに着目すると、どうやら「云日」は「育」が分解されてしまった結果と

見なすことができる。¹² 親本の段階でなのか、底本の書写段階でなのか、これも定かではないものの、意味をよく理解せずに書写していることが窺える例である（なお、「須弥山」の返り点も誤写といえる）。しかも、底本では「云」が行末、「日」が行頭に記されており、一見しただけでは、「育」と予想するのが困難な状態となっているのである。

次の例は、〔第三〕「同悲母事（二）」の冒頭である。

花下半日之客、速悲散（ト）春風、月前一夜之友、又惜（一）隱（二）暁（三）雲。只等閑之與翼之伴、惜如此。況、於先妣生死、永御別（一）乎。
昌子其数留此、近従之眷属又多残此。
（159上12～15）

ここで取り上げたいのは、「磯馴帖」では存疑としてこのまま翻刻せざるを得なかった「昌子」である。一見個人名のようにだが、『金玉要集』においては、故事・説話を除いて個人名が具体的に記されることは皆無である。続く「近従」と対になっていることから明らかなように、これは誰かの死去によって後に残された者のことであり、かつ一般名詞でなければならぬ。ここでヒントとなるのが、〔第七〕「北野天神御事」の、

菅承相（ハ）重代（ニ）非（ト）云トモ、泪（水）流（ラ）汲（テ）商山、風（ツ）仰（キ）玉へり。
（193上2）

である。字は四角囲みのようになってはいるが、「商山」に対応するものとしては、「渭水」が本来的であると推測できる。「北

野天神縁起」(承久本等)や、「北野天神御事」に極めて本文が近いとされる「荏柄天神縁起」などでも当該箇所は「渭水」である。ここに「金玉要集」の中において、「胃」を「昌」に近い字体で書く例を確認できるのである。すると、件の「昌」も、もとは「胃」の形に近い字であったと考えることができる。そのようなものとして挙げることができるのが、「胃」である。もし、「昌子」が「胃子」であったならば、「跡継ぎ」の意味であり、内容的にも問題はないといえよう。

最後に、「第一」「甥之事」における例を見ることにする。

古人筆云、侘々ツレツレ者ツレツレ後舅ウケ之人、等ナシナシ等者ツレツレ別ツレツレ姨ウケ之甥ウケ云云。

(147下1-2)

傍線部のように「等」を「あぢきなし」と訓ずる例は、今の所、未見である。また、「ナシ」の下の「等」も、このままでは未詳と言わざるを得ない。しかし、「温故知新書」複用門に見える、「等将」に対する訓、「アチキナシ」を踏まえるならば、「ナシ」はもと付訓であったものの一部が本文化したものの、二つ目の「等」は「将」の草体を見誤ったものと解することも可能であろう。

四

ここまでは、「金玉要集」のいわば「負」の面を取り上げてきた。しかし、逆に「正」の面にも触れなければならないだ

ろう。そういったものの一つが、他の文献との重なるの多さである。前節でも、「神道集」などに言及したが、本節では、引用された形になっている經典に関して、いくつか指摘をしてみたいと思う。

「金玉要集」に限らず、「経云」と書いて经文が引用される場合、現存する「経」の中に经文が見出せることもあれば、見出せないこともある。例えば、

「第三」「悲母之事(一)」には、

報恩経云、若有男女、依母ノ教順ニ、顔色不相違ニ、一切災難尽ク消除、諸擁護常安穩云々。(159上7-8)

とあるのだが、その文言は、「報恩経」ではなく、「心地観経」卷第三・報恩品第二之下(大正蔵三・30下)に見えるものである(若干の異同あり)。直接經典に拠ったのではないことが窺えるが、「金玉要集」の「経云」に注目すると、他の文献との関連など、興味深い事象がしばしば見出せるのである。

例えば、「第五」「率都婆事」には、

淨光陀羅尼経云、率都婆光、初從辰時、照三途八難、從未時下、六欲四禪、四無色天文。(176下8-9)

という经文の引用がある。現行の「無垢淨光大陀羅尼経」(大正蔵一九所収)には、このような文言は見当たらない。ところが、文言が一致するわけではないものの、同じく「淨光陀羅尼経」を引用し、かつ安居院唱導との関係が深い資料が存在する。真福寺蔵「因縁処」である。その「率都婆事」には、

【無垢淨光陀羅尼經】云、率都婆影、自辰時至^テ日中^ニ一没无間八難底^ニ。自日中至日没^一至悲想々想天^ニ故^ニ、無間八難底^ニ沈衆生皆離苦得樂^{スル}文。

（真福寺善本叢刊3『説經才学抄』469上）と記されているのである。

引用される經典名が「因縁処」と共通する例は、さらに見出せる。すなわち、「第五」「塔之事」での、

【譬喻經】云、若起塔人、七種^ノ功德^ヲ成就。一得国王位、二得那羅延力、三得壽命長遠、四得大福貴身^一、五得仏菩薩慈悲、六得三明六通、七^ハ得仏果^一文。（177下5、7）である。【因縁処】では、

【譬喻經】云、造塔人得十種勝利。一者不生辺地国民中、二者不受貧窮、三者不得愚癡邪見之身、四者得十六大国王位、五者得壽命長遠、六者得金剛那羅延身、七者得無此廣大福德、八者蒙諸仏菩薩慈、九者得三明六通八解脫具足、十者生十方淨土無疑文。

（真福寺善本叢刊3『説經才学抄』453上）と記されている。これも文言が一致するわけではないものの、塔を造ると得ることのできる徳の列挙において、ともに出典を「譬喻經」としているのは興味深いことである。⁽¹⁸⁾もちろん、【因縁処】以外にも、このような重なりを見せる資料の存在する可能性は充分あろう。そのような資料の博搜は、今後とも続けていくべきである。

最後に、「第五」「率都婆事」における、卒塔婆について釈していく部分に触れることにする。

次、奉釈名字功德^一者、經論^ノ異義、万多也。玄奘已去⁽¹⁹⁾ハ、講塔。新訳云、後率都婆者、云有舍利者^{云々}。十一面經云^ルニ、如上説。最勝王經云制底。山王院旧々。或云、率都婆、皆是梵語者切耳。俗呼云塔。亦語略、一舍利、二不安骨云。葉王品甫正記云、僧祇律、有舍利名塔婆。言舍利者、説為支提。瑜伽等中、若有舍利名率都婆、若有舍利但名制多文。率都婆名仏母^一、如来坐、不即実相般若三摩耶^ノ形^{ナル}義也。又、最勝王經云、治衣率都婆、此云高顯。是所化^ノ機根、上昇菩提義也。付能化^一者、可云下顯也。法花珠林云、支提翻為滅惡生善^一文。発心行菩薩、涅槃^ノ四點、同滅惡生善^{云々}。（176下14、177上5）この部分との重なりが見出せるのが、以下に挙げる『法華經鷲林拾葉鈔』巻第十四・見宝塔品第十一である。

道暹釈云、玄奘已前称^レ塔。新訳已後共伝^ニ卒都婆^一矣。輔正記云、僧祇律云、有^ニ舍利^一名^ニ塔婆^一。無^ニ舍利^一説為^ニ支提^一。瑜伽論中、若有^ニ舍利^一者名^ニ塔婆^一、無^ニ舍利^一但名^ニ制多^一矣。（日本大蔵經・447上、下）

玄奘三蔵以前と以後の卒塔婆の呼称を記すことや、四角囲みにした書名の順序から見て、『金玉要集』と『法華經鷲林拾葉鈔』は、同根のものを使っていると考えられる。また、落合博志氏によって紹介された普通寺蔵『一切設利羅集』にも、

〔藥王品輔正義〕云、順僧祇律、有舍利者名為塔婆、无舍利者名四支提。順瑜伽等、有舍利名率觀婆、无舍利但名制多。^(3ウ)

とある。卒塔婆について説く場合、右の三書に共通する文言は常套的に使われていたとおぼしい。なお、『金玉要集』の「藥王品甫正記」は未詳である。仮にそれが「法華文句輔正記」の藥王品の部分を意味するとしても、「一切設利羅集」の「藥王品輔正義」について落合氏論文が指摘するように、右に挙げた文言はそこには見られないのである。⁽³⁾

このように『金玉要集』には、様々な資料との関連を見出すことができる。他にも「澄憲作文集」、「転法輪抄」、「言泉集」、「拾珠鈔」などと重なる文言がしばしば認められるし、『沙石集』との関係も看過できない。また、芸能との関係からいえば、幸若舞などとも通底する説話や表現もいくつかある。それらについては、稿を改めて論じたいが、各方面からの発言も待たれる所である。

五

以上、『金玉要集』の本文について、気付いた点をいくつか指摘してみた。特に前半は、些細な問題の列挙に終始してしまつた感もあるが、これは、本文自体の基礎的な検討がまず必要と考えた結果である。第一節で触れた近本氏の壮大な試

みに比べれば、本稿で提示し得た結果は微々たるものに過ぎないが、なにとぞ大方の御教示を仰ぎたく思う。

注

(1) 先行研究は、『磯馴帖』解題を参照のこと。

(2) 近本謙介氏「唱導の文の集成―内閣文庫蔵『金玉要集』をめぐる―」(伝承文学研究会平成十四年度大会資料 平成14・8)。

(3) なお、長寛元年(一一六三)成立とされる「白山之記」にも「王子五所」と記されている。ただし、本地仏の記載はない。

(4) 『神道集』の「五人、王子」のうち、「太郎」の本地が「清観音」となっていることも、『金玉要集』の「清観音」という表記のものと形がどんなものだったのかを推測させる。あるいは『金玉要集』でも「請」と翻刻すべきかもしれない。

(5) 注2近本氏発表資料でも、「第八」「春日大明神御事」と『神道集』との重なり言及している。

(6) 『磯馴帖』の翻刻では、「情之習也」と注記したが、「情」は「惜」とあるべきである。なお、「中一劫(223下16)」も「一中劫」が正しい。ともに校正ミスであり、この場を借りて訂正し、お詫び申し上げます。

(7) 注5。

(8) 『往生要集』との関わりにおいては、「第二」「祖父母事」の、

魚子、其数多シ。藻塩草ニ生付ケリ。乳水モ生育モ雖レ無レ之、依カ彼ノ親ノ念子念力ノ深ニ故ニ、安穩ニ生長スト云ヘリ。何況於人倫ニ乎。祖父祖母之念力、徹骨髓ニ、愛子思深カ故ニ奉祈仏

天ニ、子孫繁昌ス。

(140下8-11)

も注意される。実は、本文に挙げた『往生要集』引用文の直前では、

有論(大智度論)云、譬如「魚子」。母若不念、子則爛壞。衆生亦爾。仏若不念、善根即壞。

(大正藏八四・61下)

と、衆生に対する仏の慈しみを、魚の母子を喩えにして述べているのである。『金玉要集』では「藻塩草」などという語も入っているなど、『往生要集』からやや遠ざかった形にはなっているのだが、本文で挙げた例と併せ見た時、たとえ直接の典拠でないにしても、『往生要集』の存在は無視できない。なお、魚を用いた喩えで、『金玉要集』に類似するものとして、『八幡宮寺巡拝記』(鎌倉期成立)下に、

覆護衆生ト云ハ、則、龍樹論ヲ引テ、タトヘハ魚ノ母ノ如シ。子ヲモラサレハ子則爛壞スト云、心ハ魚ノ母、或ハ石ノソハ、或草ノ上ニ子ヲウミツケテ後、チフサヲ含ル事ナシ、アタ、ムル事ナケレトモ、母常ニ子ヲ守力故、子則魚トナル。若母死レハ、守ル物ナキ力故ニ此子則爛壞スル也。

(古典文庫「中世神仏説話」66-67)

とあることを付け加えておく。

(9) 新大系脚注は、一つ目の傍線部について、「出典未詳。洛陽誓願寺縁起と関係あるか」とする。確かに「洛陽誓願寺縁起」(統群書類従27下・260下)にも、同一文言が見出せるが、それでも表現の淵源としての『往生要集』の存在は認識しておくべきであろう。ただし、幸若舞に関しては全くの不案内であるので、幸若研究の側から御教示をいただければ幸いである。

(10) 「暴」に「暴」などという字を当てた例(219上17)もある。

(11) 「歎」に「難」の字を当てる例は、『今昔物語集』巻第九・九話などにも見える。

(12) 近本謙介氏の御指摘による。

(13) このことについては、黒田彰氏「唱導における天神—金玉要集の場合—」(『中世説話の文学史的環境 続』所収 平成7 和泉書院)に指摘がある。

(14) ただし、「尚子(長子の意)」などの可能性も考えられる。なお、以上に挙げた例の他にも、「第九」「泰澄大師御事」の、白山に登った泰澄が、白山権現達から名乗りを受ける場面における、「我是、妙理大菩薩神務清猛沃輔弼」(清猛啓沃)名曰大己貴益、失」(215上14、

15) は、その前の「吾、妙理大菩薩、神務輔佐、行事貫首ナリ。名曰小白山ト。隠給メ」(215上12、14)と対であることから見て、「ヨリ」を「ナリ」の誤写と考えるべきであろう。同話を記す「泰澄和尚伝」(金沢文庫本)でも当該部分は「輔弼ナリ」、「元亨釈書」巻第十八でも「弼也」である。従って、傍線部は、「清猛沃輔弼」(清猛啓沃)名曰大己貴益」と訂正すべきであろう。

(15) この訓については、寺島修一氏「温故知新書」引書攷—「仲文章」の場合—(『文学史研究』34 平成5・12)、及び「諸本集成仲文章注解」(平成5 勉誠社) 166頁を参照のこと。

(16) なお、「古人筆」が具体的に何を指すのか、今の所、不明である。『金玉要集』には、これ以外にも、「俗書云」(146下18、「古人云ル事アリ」(153上8)、「世俗文書」(156下2)、「世俗文書」中云「(169下4)、「世俗家」(174下4、5)、「古人筆云」(188上16)な

どという引用があるが、典拠は特定できていない。

(17) 真福寺善本叢刊3『説経才学抄』(平成12 臨川書店)の山崎誠氏解説によれば、「因縁処」は、現在はそれぞれ別々に挿架されている三帖(他は「諸聖教説釈」と「説経才学抄」)のうちの一つであり、これらはもとは一具のものであったとのことである。また、同解説では、これらが安居院などの天台系唱導書に依存しつつ、真言僧用に改訂されたテキストであるということも指摘し、その成立を正和四年(一二二五)頃と推定している。なお、同解説では、「因縁処」という形で同書名を挙げるが、本稿では混乱を避けるため、「一」を用いた。

(18)『金玉要集』には、「奇法経(未詳)云」として「造立精舎」の十徳(174上10~13)、「十輪王経(未詳)云」として「造立率都婆」の八種功德(177上5~8)、「花嚴経云」として「建石塔」の七種功德(177下18~178上2、ただし「華嚴経」にこのような文言はない)が列挙されている。唱導において、このような徳の列挙がいかに多く用いられていたかが窺えよう。なお、最後の「花嚴経云」以下の功德は、「言泉集」で「教蒙得度経(未詳)云」として引用される文言に酷似している(注2近本氏発表資料でも触れられている)。また、「三国伝記」巻第三・第十二話「灌頂率都婆功德事」でも、経典名は記さないながら、ほぼ同じ七種功德が「行脚ノ僧(石山寺の如意輪観音の化身)」の口から語られている。

(19) 落合博志氏「普通寺蔵『一切設利羅集』—影印並びに引書考証—」(国文学研究資料館「調査研究報告」18 平成9・6)によれば、同書の伝来などは不明であり、その内容は、主に經典や中国撰述の注疏、中国の仏教関係史伝や靈驗記類に見える舍利・塔・率塔婆の功德・靈瑞・由緒などを説いた要文を蒐集・編纂したも

のということである。

(20) 注19落合氏論文の「引書の考証」では、「輔正義」は、或いは道遍述「法華文句輔正記」か。ただし同書の薬王品の項には、該当する文は見出せない」とする。もともと「法華文句輔正記」巻第八・釈見宝塔品には、「僧祇律云、無舍利名支提、有舍利名塔」(正統蔵経・一・四五・二13ウ)と類似の文言が見える。

(21)「澄憲作文集」「転法輪抄」「言泉集」との関係は、注2近本氏発表資料にも指摘がある。「沙石集」と「金玉要集」との間に重なりが見出せることは、阿部泰朗氏「唱導における説話—私案抄—」(説話と儀礼 説話・伝承学⁸⁵所収 昭和61 桜楓社)に指摘されている。

(やまざき・じゅん 大阪工業大学非常勤講師)